

双つの耳

『あまぎ』第44集

朝の陽の届く厨にひととせの自戒を込めて暮れの刃を研ぐ  
持つ杖は疎かならず身の一部ともに歩みて共に老いゆく

みどり

凍て路を携へ帰る寒の卯たとへば嬰兒を抱くやふに

黙禱の禱なる文字を辞書に引き<sup>3・11</sup>今日の日記に

既に夏 素足に下駄の感触が甦りきて遠きふる里

卒寿まで生き存らへての倖は朝ひとときのコーヒーに足る

しばしばも物をとり毀す双の掌の生命線の長き流れは

聴きとれぬ言葉交はしつ哀しかり双つの耳のそれぞれ孤独